

☆ところで、「武」とは誰をさすのか？

→実は「武」については、日本のどの天皇と同一人物かということについて、ほぼ特定されている。

Q 7. その天皇とは？ [P. 27①&「系図」] A 7. 雄略天皇

※ なぜ中国で「武」とされたかという、この天皇は幼いころの名を「大泊瀬幼武」といい、一般に

「6 ワカタケル大王」とよばれていたことにも由来するとされる。

(さらに…)

☆この「ワカタケル大王」の名前が刻まれた武器が2ヶ所の古墳から発見されている。

Q 8. その2ヶ所の古墳とは… [図表P. 46①②]

* 7 埼玉 県・稲荷山 古墳 (鉄剣)

* 8 熊本 県・江田船山 古墳 (鉄刀) → 刻まれた文字を読んでみよう。

Q 9. これらの発掘からワカタケル大王 (=雄略天皇) の支配力が及んでいた範囲、すなはちヤマト政権の勢力範囲が推察できる。それはどの程度の範囲？ [図表P. 46「解説」]

A 9. 雄略天皇の時代のヤマト政権の勢力は、9 関東 地方から10 九州 中部にまで及んでいたことが推測される。

☆古墳時代中期の5世紀は「五王の五世紀」と、覚えよう。

◇ 図表 P. 46中央上、日本地図の下にある「解説」は全体に印をしておき、このページを開くたびに読み返すようにしましょう。

◇ 重要語句の解説をします。

これまで、『後漢書』東夷伝において倭国の王に対しては「漢委奴国王」、『魏志』倭人伝において卑弥呼に対しては「親魏倭王」、そして『宋書』倭国伝において武に対しては「安東大將軍倭王」といった称号が授けられてきました。弥生時代から古墳時代の外交においては、日本は皇帝の臣下として使節を派遣し、そして中国の皇帝から称号を授けられ王に任命されるという形式をとることで権威づけを図ってきました。①日本は中国の臣下、②中国の皇帝から日本の王としての称号を授けられその支配を承認される、この①②の形式をとることを「冊封(さくほう)」といいます。

皆さんは中学校で、聖徳太子が遣隋使を派遣したことを覚えているでしょうか？これから高校で再び学習をしますが、聖徳太子の遣隋使はこの冊封をしませんでした。遣隋使は中国の臣下として隋に行ったのではなく、対等の国という姿勢で外交に臨んだのです。このとき隋の皇帝が激怒したことを中学校で習った人も多いと思います。この「冊封」とそれに関連する語句である「朝貢」を含む解説が、図表 P. 2の左下「東アジアの国際秩序」および図表 P. 4の左下「冊封・朝貢体制と日本」にまとめられています。この表を見ると倭王武のあと、日本が冊封を受けることは長く行われず、次に冊封を受けるのは室町幕府の三代将軍・足利義満であることがわかります。図表のはじめの方はあまり目を通すことがないと思うのですが、特に日本史が受験科目の一つになる可能性がある人はこうしたページにもときどき目を通すようにしましょう。私の方でも必要に応じて紹介していきたいと思います。